

配達されない三通の手紙

2006(平成18)年1月2日鑑賞〈シネ・ヌーヴォ〉

★★★★



監督＝野村芳太郎／原作＝エラリー・クイーン／出演＝佐分利信／乙羽信子／小川真由美／栗原小巻／神崎愛／片岡孝夫／松坂慶子／墓目良／竹下景子／渡瀬恒彦／小沢栄太郎（松竹配給／1979年日本映画／131分）

……ある日発見された日付の違う3通の手紙には、妻の死亡を悼む文章が……。これは一体何……。そして誰が、何のために……。『宋家の三姉妹』(97年)ならぬ「唐沢家の三姉妹」を中心に、山口県萩市の名家を舞台として展開される「犯人捜し」のスリルとサスペンスはさすが。しかし、エラリー・クイーンの原作時と違い、現代ニッポンでは、戸籍制度が充実しているから、「謎の妹」が2人も登場するのはちょっと不自然……。こんな指摘は、イヤミな弁護士評論家だけかもしれないが、やはり一工夫いるのでは……？

美しい三姉妹は三人三様……

この映画に登場する「宋家の三姉妹」ならぬ「唐沢家の三姉妹」は、山口県萩市の名家唐沢家の麗子（小川真由美）、紀子（栗原小巻）、恵子（神崎愛）の三姉妹だが、性格はみんなバラバラで三人三様……。主人公は次女の紀子だが、彼女は結婚寸前となっていた藤村敏行（片岡孝夫）が突然失踪したため、半病人状態に落ち込んだまま3年が過ぎようとしていた。三女恵子は検事の峰岸（渡瀬恒彦）との婚約が決まっている様子だが、突然、甥にあたるというハーフのボブ（墓目良）が、日本文化研究のために唐沢家を訪れてきた後は、なぜかボブとえらく親しく……。こんな旧家に反発して家を飛び出し、自分でスナック店をやっているのが長女の麗子。長女は家を守るもので、家を飛び出していくのは三女というのが相場（？）だが、この映画の設定がそんな慣習を破っているのも、3人の美しい娘たちのキャラに照らして面白いもの……。もっとも、今どきの若

い人たちはこんな有名な3人の女優をほとんど知らないのでは……？

舞台は山口県の萩

この映画の舞台は山口県の萩。山口県出身で、山口県を舞台とした映画をたくさんつくっているのが佐々部清監督。だから彼には是非、本作のリメイク版をつくってもらいたいもの……。それはさておき、山口県の萩といえば、松下村塾の吉田松陰や奇兵隊の高杉晋作が有名。ところが後述の藤村敏行の妹(?)藤村智子(松坂慶子)は、そんな萩の歴史など全く知らないうえ、興味もない様子。後に判明する事実関係によれば、それはそれで当然のことだが……？

当主は長門銀行の頭取

唐沢家の当主である唐沢光政(佐分利信)は長門銀行の頭取という設定。1970年代といえば、日本の金融行政は護送船団方式の絶頂期……？三井・三菱・住友・安田という旧財閥系に限らずとも、各地方に存在する地方銀行は未来永劫に繁栄するもので、地方企業の金融を一手に引き受ける頼りがいのある存在と確信されていたものだった。私の出身地である愛媛県松山市では伊予銀行が、山口県萩市の長門銀行に相当するもの……。したがってこの映画に登場する長門銀行の頭取である唐沢光政の傲慢さやワンマンぶりは、今でこそ多少異様に見えるかもしれないが、あの当時では当然の姿……。バブルが崩壊した1990年代に入っからの信用金庫や地方銀行の破綻と銀行の再編・統合を経てきた歴史を見れば、この長門銀行の繁栄とその頭取の羽ぶりの良さ(?)は、まさに過去のまぼろし……？

2006年1月には三菱東京UFJ銀行が発足したが、野村芳太郎監督が今生きていたら、こんな銀行の再編・統合の姿をどのように描くのだろうか？『金融腐蝕列島・呪縛』(99年)の原田真人監督とはまた異なる視点から、社会派であり、リアリズム追及の野村芳太郎監督が描く『金融腐蝕列島・呪縛』を是非観たいものだが、それは所詮ムリな願望というものか……？

藤村敏行はなぜ突然戻ってきたの？

映画は、リュックを背中に背負ったボブが1人アメリカから日本に入り、唐沢

家の屋敷を訪れるシーンから始まる。そしてそれに続くかのように突然唐沢家を訪れたのが藤村敏行。敏行がなぜ今になって、唐沢家を訪れたのか？ それについて映画は何も語らない。しかし、次女の紀子は敏行の失踪から3年経った今でも、敏行のことを忘れられないようで、姉の麗子を介して敏行からの電話が入ると、紀子はいそいそと(?)敏行を出迎えに……。そして何と紀子は今でも敏行を愛しており、敏行と結婚すると宣言したから大変。もちろん、当主の唐沢光政は、こんな頼りない敏行を紀子の夫とすることには大反対だが、戦後民主主義が定着しつつある1970年代。いくら父親が気にいらなくても、娘が結婚を望む男を拒否することは、到底ムリ……。そこで唐沢光政は、①唐沢家の敷地内に紀子ら夫婦のために新築していた家に住むこと、②敏行が長門銀行に勤めること、という2つの条件を付して、2人の結婚を認め、盛大な結婚式まで催してやったが……。

配達されない三通の手紙とは？

ボブが仮住まいとして使用していた新居に、敏行と紀子夫婦が引っ越し作業をしていた時、突然階段で崩れてしまった敏行の本の束から出てきたのが、封筒に入った3通の手紙。思わずその場でその手紙を読んだ紀子の顔はたちまち真っ青に……。それを見ていたのがその引っ越しを手伝っていた恵子とボブの2人。さてこの後紀子を心配したにわか仕立ての名(迷)探偵たちがとった行動とは……？ 個人情報保護法が施行された今にあっては、この2人の行動は犯罪と言われても仕方がない違法なものだが……？

手紙の日付は8月11日、8月20日、そして9月1日

この映画の原作は有名なエラリー・クイーン。そして配達されない三通の手紙の日付は、①8月11日、②8月20日、③9月1日とされており、①は妻が病気になって心配、②は妻の病気が重くなり、かなりヤバイ、③は妻がとうとう今日死んでしまったというもの。こりゃ何とも恐ろしい内容であることは明らか……。さらに、こんな手紙を読んだ後、紀子は敏行から出された飲み物を飲むと気分が悪くなり倒れ込むことも……。これはひょっとして……、と考えるのは当然。その思いはボブも恵子も同じ。するとその犯人は……？

藤村にはホントに妹がいるの？

一見幸せな結婚生活に入ったかに見えた藤村と紀子夫婦を突然訪れてきたのが、藤村の妹の智子。この智子がこの映画のキーパーソンだが、エラリー・クイーン原作による19世紀のイギリスならいざ知らず（？）、1970年代の日本では戸籍制度がかっちりと確立しているはず。島崎藤村の『破戒』は部落差別をテーマとした小説として有名だが、今はそんなややこしい問題は少なくとも表面上はなくなり、憲法上すべての国民は平等なものとなっている。しかし他方、戸籍上は離婚や婚外子、そして認知あるいは嫡出子 VS 非嫡出子などの身分法上の位置づけがはっきりしているうえ、これらは必要に応じて戸籍を調べればわかる仕組みになっている。わが娘が結婚するについて、「相手の男の戸籍を調査する」などと大層な言い方をしなくても、婚姻届を提出するについて新郎新婦の戸籍謄本を取りよせるのはごく普通のこと。そして、あえて本人の戸籍に限定した戸籍「抄本」ではなく、戸籍「謄本」を見れば、新郎の父母や兄弟の存否は当然わかるはず。まして、長門銀行の頭取の娘を藤村に嫁がせるという決定をした唐沢家であれば、本来藤村の両親や兄弟を確認するため戸籍謄本の取りよせぐらいはしたはずだが、それがこの映画では……？ 突然妹が北海道の釧路から出てきて、なれなれしく「お兄さま……」と話しかけている姿を見ても、なお戸籍謄本を調べないのはいかにもナンセンス……？ エラリー・クイーン原作を日本バージョンにした映画だからと自分を納得させながら観ていたが……？

あの当時の松坂慶子のキャラは……？

私は松坂慶子の最高の映画は、深作欣二監督の『蒲田行進曲』（82年）だと信じている。また2005年年末のテレビ番組『オールスター Shall we ダンス！』で観た松坂慶子はこのダンス大会で優勝し、「さすが自分を見せることのプロ」とほめられていた。それはそれとして私も認めるものの、その肢体はあまりにも豊満すぎ……？ 『キネマ旬報』1月下旬号によれば、監督第2作目となる奥田瑛二はこの松坂慶子を主演に起用するについて10kgやせるよう指示し、彼女はそれをきっちり実践したとのこと。年末のダンス番組での豊満さや『桃色』（04年）で

の厚化粧ぶりにうんざりしていた私だが、さすがに1979年当時の松坂慶子の色香にはビックリ！ 清純派女優の代表（？）栗原小巻とは全く異質で大胆な演技と、後ろ姿ながら全裸の姿を堂々とスクリーン上でみせる松坂慶子の女優根性にあらためて感心。『事件』（78年）に続いて松坂慶子をキーパーソンとなる藤村の妹役に起用し、当時としては思い切ったオールヌード姿を披露させた野村芳太郎監督の鑑識眼にも感心……。

突然竹下景子が登場

今どきの若い人は竹下景子といえば、風邪薬「パブロン」のコマーシャルに出ているオバさんというイメージしかないかもしれないが、彼女は何を隠そう、世の男たちが「ヨメにしたい理想の女性No.1」として選んでいた理知的な魅力をもった美女。そんな竹下景子が映画の後半になって突如登場するが、その役柄は今や殺人犯として逮捕され新聞を賑わしている藤村の大学の後輩で、新聞記者をしている大川美穂子として。彼女は自分の先輩である藤村が殺人など犯す人間ではないという確信を訴えるために登場し、峰岸検事に必死にアピールするが、それだけでは根拠不十分なことは明らか。そんな彼女が最後にとった行動とは……？そして彼女の正体は一体ナニ……？ もっとも、これも戸籍謄本さえ調査すればすぐにわかることなのだが……？ そんな現実論は別として、スリル満点のストーリーを十分に楽しもう……。

さて、真犯人は……？

推理小説を先に読んだ人から、読む前に犯人を告知されてしまうほど味気ないものはない。また複雑な推理小説を映画化した作品を先に観た人から、映画を観る前にストーリーの枠組みを教えられるほど味気ないものもない。したがって、この推理小説を舞台とした映画における『配達されない三通の手紙』の意味や〇〇殺しの真犯人をここに書くことができないのは当然。さて、この映画においては誰が死んでしまうことになるのか？そしてその真犯人は一体誰なのか？その動機は？そのカラクリは？それらはすべて、映画を観てのお楽しみとしていただく……。

2006(平成18)年1月5日記